

2015年(平成27年)4月6日

「第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」
受賞者決定および表彰式開催のお知らせ

縁の下からスポーツを支える2名の「スポーツトレーナー」が奨励賞を受賞

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)では、「第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会)の選考を行ない、平成26年度の受賞者について下記のとおり決定しました。

同賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰する制度です。スポーツに関する幅広い分野において、高く評価されるに相応しい功績をあげ、かつこれまで注目を浴びることの少なかった「縁の下の力持ち」と言える人物・団体にスポットをあてています。

なお、「第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式」を、2015年4月20日(月)、如水会館(東京都千代田区)にて開催します。

記

第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 受賞者 (敬称略)



【奨励賞】

妻木 充法 つまき みつのり

医学博士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、
日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター

公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術



【奨励賞】

門田 正久 もんでん まさひさ

理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、
日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員

障害者アスリートの
メディカルサポート環境を拡充する取り組み

第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式

- ◆日時 : 2015年4月20日(月)
表彰式/15時00分～、交流会/16時00分～(受付/14時30分～)
- ◆会場 : 如水会館 2F (東京都千代田区一ツ橋2丁目1-1 如水会ビルディング)

■ この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください ■

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS) 事務局: 担当・石塚

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500 番地 Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112 <http://www.ymfs.jp>

www.ymfs.jp

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500
TEL : 0538-32-9827 FAX : 0538-32-1112

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

2500 Shingai, Iwata, Shizuoka, 438-8501 Japan
Tel: +81 538 32 9827 Fax: +81 538 32 1112

■スポーツチャレンジ賞の概要

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどスポーツに関する幅広い分野において、高く評価されるに相応しい功績をあげられ、且つこれまで注目を浴びることの少なかった「縁の下の力持ち」的な人物・団体にスポットライトをあてています。また本賞では、チャレンジスピリットあふれる受賞者のプロセスやその実像を通して、挑戦(チャレンジ)することの尊さ、大切さや「努力は報われる」ことが社会に浸透していくことを願っています。

	功労賞	奨励賞
対象となるチャレンジ	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げたチャレンジ	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げたチャレンジ
評価のポイント	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的なチャレンジであること。たとえば指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献、もしくは海外などで裾野拡大に尽力したチャレンジなど。	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値するチャレンジであること。たとえば指導者、研究者、トレーナー、サポートメンバー、審判、ジャーナリストなどによる世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たしたチャレンジなど。
賞金/副賞	賞金 100万円(団体の場合は200万円) 賞状・メダル / 副賞	

■ 歴代受賞者 (敬称略)

	受賞者	分野	選考の理由となったチャレンジテーマ	
第1回 平成20年度	功労賞 中野 政美	柔道指導者	女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展	
	奨励賞 丸山 弘道	車いすテニス指導者	北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ	
第2回 平成21年度	功労賞 塚越 克己	スポーツ医・科学研究者	日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」	
	奨励賞 増田 雄一	アスレティック・トレーナー	トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み	
第3回 平成22年度	功労賞 高田 静夫	サッカー審判員	日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用	
	奨励賞	中村 宏之	陸上指導者	雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践
		中北 浩仁	アイススレッジホッケー指導者	強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 平成23年度	功労賞	岸本 健	スポーツ写真家	スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
		水谷 章人	スポーツ写真家	独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
	奨励賞	(該当なし)	—	—
第5回 平成24年度	功労賞 樋口 豊	フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者	国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献	
	奨励賞 江黒 直樹	ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ	「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦	
第6回 平成25年度	功労賞 臼井 二美男	技師研究員、義肢装具士	スポーツ用義足の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦	
	奨励賞	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部	戦略広報という立場から東京2020招致を支えたプロフェッショナル	

■ 選考委員会 (敬称略/五十音順)

選考委員長	選考委員	選考委員	
浅見俊雄	東京大学名誉教授 / 日本体育大学名誉教授	篠原菊紀	諏訪東京理科大学共通教育センター教授
伊坂忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部教授・副学部長	杉本龍勇	法政大学経済学部教授(元陸上選手)
今給黎教子	海洋スポーツインストラクター / 冒険家	高橋義雄	筑波大学体育系准教授
衛藤隆	東京大学名誉教授 / 大阪教育大学客員教授	福永哲夫	鹿屋体育大学学長 / 東京大学名誉教授
遠藤保子	立命館大学産業社会学部教授	増田和実	金沢大学人間社会研究域人間科学系教授
景山一郎	日本大学生産工学部教授	丸山弘道	株式会社オフィス丸山弘道
川上泰雄	早稲田大学スポーツ科学学術院教授	村田互	専修大学ラグビー部監督(元ラグビー選手)
北川薫	学校法人梅村学園 学事顧問	山本裕二	名古屋大学総合保健体育科学センター教授
草加浩平	東京大学大学院工学系研究科特任教授	ヨコゼッターラント*	嘉悦大学女子バレーボール部監督(元バレーボール選手)
小西由里子	国際武道大学体育学部教授	綿貫茂喜	九州大学大学院芸術工学研究院教授
定本朋子	日本女子体育大学大学院研究科長 / 基礎体力研究所所長・教授		

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリスト等から候補者の推薦を募り、2回の選考委員会を経て決定

第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 奨励賞

公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術

つまき みつり
妻木 充法 (1952年生・静岡県出身)

医学博士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター

東京メディカル・スポーツ専門学校 副学校長、ジェフユナイテッド市原・千葉 メディカルアドバイザー

[チャレンジの概要]

FIFA ワールドカップやオリンピックのサッカー競技では、1大会につき約80人のトップレフェリーが召集され、6～8人のトレーナーがレフェリーのメディカルサポートにあたっている。通常、レフェリー部門のトレーナーは開催国のサッカー協会が選出するが、妻木氏は2006年ワールドカップドイツ大会以降、FIFAからのインビテーションによる特別枠のメディカルスタッフとして主要大会で活躍している。これまで五輪を含む通算22の国際大会で鍼治療の手技をふるい、唯一の東洋医学の専門家として各国のレフェリーから厚い信頼を集めている。37年におよぶトレーナー経験と確かな医療知識に裏付けられた施術により、ピッチ上の公正なジャッジを縁の下から支えるとともに、東洋医学の認知や信頼性向上に貢献している。

[主な略歴]

大学在学中に角膜移植の手術を受けたことにより、卒業後は小守スポーツマッサージ療院で働きながら、夜間の専門学校に通って鍼灸師の資格を取得。アイスホッケーやプロ野球チームなどのトレーナーを経て、1979年のFIFAワールドユース日本大会に出場するサッカー日本代表にトレーナーとして帯同した。これを起点として、以来、FIFAワールドカップスペイン大会やメキシコ大会、ロサンゼルス五輪やソウル五輪出場をめざすサッカー日本代表のトレーナーとして活躍した。この時期、選手とともに国際舞台への挑戦をめざしながらそれを実現できなかったことで、「自分の中でワールドカップに対する気持ちが膨らんでいった」。

一念発起したのは1988年。単身ドイツに渡り、ヴェルダー・ブレーメンのトレーナーとして働きながら最新の情報、技術、設備、組織などを学んだ。日本とドイツの資格制度の違いから正式契約には至らなかったが、所属していたシーズンにブレーメンがブンデスリーガを制覇するなど、「技術は世界でも通用する」という手応えをつかんでの帰国となった。帰国後は、日本サッカーリーグ1部に昇格した松下電器サッカー部のトレーナーを経て、プロ化をめざす古河電工サッカー部のトレーナーとなり、Jリーグ発足後はそのままジェフユナイテッド市原(現・ジェフユナイテッド市原・千葉)のチーフトレーナーに就任した。ジェフ所属のリトバルスキー選手は妻木氏を「マジックハンド」と呼び、ブレーメン時代の所属選手でもあったオルデネビッツ選手は妻木氏の手技との再会を喜んだ。またその一方、1993年にはJクラブのトレーナーのレベルアップを目的としたJリーグスポーツマッサージ研修会(現・Jリーグアスレティックトレーナー会)を発足し、初代会長にも就任した。

レフェリーのメディカルサポートに初めて携わったのは、2001年FIFAコンフェデレーションズカップ日韓大会。日本サッカー協会からの要請により、2002年FIFAワールドカップ日韓大会、FIFAクラブワールドカップ日本大会でもレフェリーのメディカルサポートチームに加わった。これらの大会で妻木氏の「即効性の高い確かな技術」が注目を集め、2006年FIFAワールドカップドイツ大会からは、スイス人のマリオ・ビジーニ氏とともに特別枠のトレーナーとして主要大会で活躍している。



そうした中、神秘的な東洋医学について各国レフェリーから「Why?」と尋ねられることも少なくなく、それらの質問に対して明確な回答や根拠を示すこと、また後進のレベルアップに貢献することを目的に順天堂大学夜間大学院に社会人枠で入学(2014年春・修了)。医学博士号(Ph. D)を取得した。現在は東京メディカル・スポーツ専門学校の副学校長として、次代のスポーツトレーナーの育成にも尽力。現日本代表トレーナーの前田弘氏やコンディショニングコーチの早川直樹氏はジェフ千葉で師弟関係にあり、元ベトナム代表トレーナーの藤本栄雄氏は東京メディカル・スポーツ専門学校の卒業生。

第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 奨励賞

障害者アスリートの メディカルサポート環境を拡充する取り組み

もんでん まさひさ
門田 正久 (1964年生・栃木県出身)

理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、
日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員

医療法人社団飛翔会 理事、(株)ケアウイング 取締役、NPO法人ケアユナイテッド 代表
日本障がい者スポーツ協会 トレーナー部会部会長、日本パラリンピック委員会 運営委員 強化委員、脊髄小脳変形症友の会 役員、
島根リハビリテーション学院 非常勤講師、福山大学経済学部スポーツマネジメントコース 非常勤講師、朝日医療専門学校 広島校 非常勤講師

【チャレンジの概要】

2000年にフランスで開かれた車いすテニスの国際大会ワールドチームカップに、日本代表チームのトレーナーとして帯同。以来、理学療法士としての知識と経験、アスレティックトレーナーとしての幅広い現場経験を背景に、障害者スポーツトレーナーの第一人者としてリーダーシップをふるう。パラリンピックには2004年アテネ大会にたった一人の本部トレーナーとして帯同。山積する課題を持ち帰り、帰国後は障害者スポーツトレーナーの育成や環境整備に奔走した。この結果、2008年北京大会では2人、2012年ロンドン大会では4人の本部トレーナーが日本選手の活躍をサポートした(いずれも門田氏を含む)。また、日本障がい者スポーツ協会の医学委員会、技術委員会とともに取り組んだ障がい者スポーツトレーナー制度の創設(2008年)や、各競技団体のトレーナーとの連携も門田氏の功績の一つ。現在は大会を終えた後の継続的なサポートをめざして、地域の障害者スポーツトレーナーの育成・体系化に取り組んでいる。

【主な略歴】

国立呉病院付属リハビリテーション学院を卒業後、理学療法士の資格を取得。勤務先の医療法人社団朋和会 西広島リハビリテーション病院でプロ野球新入団選手のフィジカルチェックや実業団陸上部のサポートを担当し、アスレティックトレーナーとしての第一歩を踏み出した。また、地域の身体障害者スポーツセンターで障害者スポーツとの接点生まれ、それをきっかけに2000年に開かれた車いすテニスの国際大会に日本代表チーム初のトレーナーとして派遣された。この大会では、車いす使用者にとって「手は足でもあり手でもある」ことを実感するとともに、宿舎と試合会場の移動などにも十分な配慮が必要なこと、また健常者と共通する動きや異なる動きなど、障害者アスリートのサポートに必要なさまざまな要件を発見した。

初めて本部トレーナーとして帯同したパラリンピックアテネ大会では、各競技の特性や各国選手のコンディショニング手法等を視察する計画だったが、たった一人で多数の選手のケアに追われ、選手村から離れることができず目的を果たせなかった。帰国後、ゴールボールや陸上、シッティングバレー、水泳、アーチェリー等の国内大会等への自主的な視察を繰り返し、各競技やアスリートへの理解を深めていったことが、その後のパラリンピックでの24時間対応のトレーナーブースや酸素カプセルの導入など、各種実効性の高いサポート施策の実現につながっている。

2012年パラリンピックロンドン大会に向けて、「外国チームの速く強く強いボールに対応したディフェンス」をテーマに掲げた女子ゴールボールチームのフィジカルトレーニングを指導。決勝戦は初めて会場で応援し、パラリンピック団体種目としては日本初の金メダル獲得の瞬間に立ち会ったことが「一番の思い出」と話す。

現在は日本障がい者スポーツ協会トレーナー部会部会長として本部トレーナーの派遣や現地でのコーディネイトを行うほか、各競技団体との連携・相談窓口としても活躍する。門田氏が創設に携わった障がい者スポーツトレーナー制度の有資格者は、2014年度までに97人。2020年パラリンピック東京大会までに200人の登録をめざす。

